
ペっぽのトンネル

むん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペツぱのトンネル

【Zコード】

Z0625V

【作者名】

むん

【あらすじ】

主人公の「やまくん」、妹の「そらちゃん」、それにちょっと変わった子ねこ「ペツぱ」の楽しい物語。

ある日、やまくん（8歳）は不思議な布団のトンネルを抜けて明るい原っぱに出る。そこは自由にペツぱと遊べる一人だけの世界。

小さな一人の兄妹と育つた子ねこが自分も同じ兄弟のように思つてゐる、そんな感覚がこの物語になりました。

小説元結しました

Goodbook Project2
book .jpnnewpage54 .htm
" http://good

— 原っぱ

ぼくの名前は「やまは」、小学六年生。
これは本当にあった話。

ぼくの家で本当にあった話なんだ。

三年前のことだった。

妹のそらは寝てしまった。となりですすす寝息を立ててる。もともと寝つきがいいんだけど、つかれもたまってるだろ。四月になつて、そらは小学校へあがつていった。

ぼくは安心して、トンネルをくぐり始めた。

今度はいい感じだ。ネコのペッぱといつしょに通つたときと回り。

空間がゆがんでゆくような気分・・・。

(んー、心がまざつていくような感じつてこつか)

ペッぱとぬけた布団のトンネル。何回通つても不思議なトンネル。ぼくの布団なんだだけね。

(今度はぬけられるだらうか・・・)

胸がどきどきしてくる。

(あの原っぱに、こるんだろうか?)

胸がしめつけられるような気がしてくる。

苦しい。

せつない。

(それでも行きたい!)

ペッぱに会いたい、やつ思いながりすこぶん長いあいだトンネルの中をはつていた。

「あつ!」

小さく光る点が見えた。

光る点はあるじ月のよつになつて、次第に大きくなる。

あの明るいのは窓だ、トンネルの出口にちがいない。あの外が原っぱだ。

・・・・・

初めてそこに行つたのは、その四か月前の十一月だつた。ぼくはまだ小学一年生。ペッぱは生まれて六ヶ月で、一キログラムの黄トラのこにやだつた。（あ、こにやは子ネ口のことだよ）そのじるぼくがベッドへ行くと、いつも少しおいてペッぱがやつてきた。待つていました、とこじつにあらわれるんだ。

その夜もやつだつた。

そらは先にベッドに入つていた。布団を深めにかぶつていのけび、こつちを見ていのる。

「やまちやん、またシャツがでてるよー」

「わかつてゐよ。そら。早くねろよ」

シャツをおしこみながら布団に入つた。

そらは「オトの妹だ。」「空音」と書いて「そらね」。まだ保育園だつた。お母さんに似てしつかりもの。それはいいんだけど、ちよつといつねれこ。そんなとこまで似てしまつてゐ。「やまちやん、またぼんやりして」なんてよく言われる。「ちよつと空想していんだけ」と言つて返すけど、兄貴としてのメンツがなによつでくやしいんだ。

そんなぼくの名前は「山羽」つて書く。たよりがいがないのか、そらは「やまちやん」と呼ぶ。まるで同じ年みたいだ。

そらは、こつでもあつとこつ間に寝てしまう。ぼくもその内、うと

うとしがかる。あると、ペッぱがあらわれる。キャットドアをぬけて、「とととと」と。まくらもとことびのつて、ぼくのかたの辺りから鼻をつつむと、おもむろに「ぐごぐごぐ」、と布団の中に入つてくるんだ。こつものことだからあんまり氣にしてない。ぼくはペッぱがもぐりこんだくらいには寝てしまつている、と思つ。でも、その夜はちがつたんだ。そらは寝かひやつてたけび、ぼくはまだ起きていた。そして、ペッぱがいない氣がした。

たしかに布団に入ったのに。

「あれ、ペッぱ？」

ぼくは吸こじまれるよつて布団に入つていつた。ペッぱみたいに、頭から。

そこは、ぼくの布団のまゝのままでトンネルのよつだつた。

（へんな感じだな）

でもペッぱが気になつて、布団のトンネルをはつていつた。どのくらこの時間がたつたり。遠くに光が見えて、トンネルをぬけた。

そこは陽だまりの小さな原つぱだつた。

明るい原つぱにペッぱがいる。真ん中に横になつていた。

「やまくんもこれたんだ。よかつた！」

「うふ、びつくつだな。ふとんもなくひきやつたし。じいじまどじい？」

応えておこで、自分におどろいた。あれ、ペッぱと話をしてる？

「んん、ペッぱが話してこる？」

「やまくんの家でも話してゐるよ」とこつ。でも、じいじではもつと話が通じるらし。

「こつもわかるけど」

ペッぱは少し不思議そつな顔をした。

「やまくんの家でも話してゐるよ」とこつ。でも、じいじではもつと話が通じるらし。

「それよりね」

ペッぱはゆっくり起き上がる。胸につけたに空気を吸つてみせた。

「なんと、立てるんだよ！」

小さな原っぱの中で、何でもなく自然に立つていた。
ぼくの田の前に両手をのばして、ぐーぱ、ぐーぱしてゐる。手も田
に使える。

ペッぱは家で不思議に思つていたらしく。何故両足で、一本足で立
てないのか。両手の指が使えないのか。

「ねえ、何してあそぼう？ セツカクやまくん来たんだし

「ようし。じゃあ、あのチヨウチヨをつかまえようー。」

原っぱにはチヨウが飛んでいた。モンシロチヨウだ。

ぼくらはチヨウを追いかけた。ペッぱは四足で走つていく方が速い。
そして、飛びつくとき、ぼくと同じように手をのばしている。不思
議な感じだ。一人で息が切れるまで走り回つた。

「こんな場所があつたんだねえ。ペッぱと話せるなんてうれしいよ
ついに走れると、一人でおおむけに転がつた。はあはあ、息をつ
いてる。

「やまくん、いつも話してるじゃないか」

「いやあとしか聞こえないもの。なんとなくはわかるけど

「ぼくの言葉、わかりづらいんだね」

ちょつと残念そうだ。

やわらかくてしつとりした草が気持ちよかつた。ひんやりとしている。
目を開けると空がある。青い空。白くて細長い雲が流れしていく。
そこへチヨウがひらひらきてペッぱの鼻にとまつた。

「あははー！」

あんなに追いかけてつかまえられなかつたのに。おかしくて一人で
笑つた。

「やあ、楽しいな」

その日は、日が暮れるまでおじいこをして遊んだ。

「ねー、やまくん、また来ようよ」

ペッパとまた来る約束をした。

原つぱは森に困まれている。でも一か所だけブッシュのトンネルがあつて、そこがぼくの布団に通じているらしい。走り回つすぎて、本当にもつつかれてねむたくなつたころ、ペッパとこっしょに部屋へもどつた。

布団に入り直して「おやすみ」を囁いた、「いやあ」と囁いた。たしかに会話してるんだけど。なんとなくはわかるものの、やっぱりネコの言葉だよなあ。

それから何回か、ペッパはおとわれるよつて原つぱへ行って遊んだ。

そうだ、ペッパは面白こやつだった。

生まれたのはこの六か月前、その年の六月だ。

- - - - -

小説冒頭（一章のみ）

続きを読む”<http://wwwabook.japanewspaper54.html>”に掲載されています。

(後書き)

最後にぺっぴに会えてほつとある、そんな作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0625v/>

ペッパのトンネル

2011年10月9日11時47分発行